

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育)(2014.03) 第30号:27~39.

哲学教育の現場から一心の哲学の場合

長谷川 吉昌

哲学教育の現場から一心の哲学の場合 Teaching the Philosophy of Mind: A Case Study

長谷川 吉昌
 Yoshimasa HASEGAWA

Abstract

Can the philosophy of mind be a center of philosophies in general? Can problems on the human mind and those of other creatures or artifacts that are central to the philosophy of mind be also the core problems in the philosophical discussions in general? By posing such problems and teaching the students how to seek answers to them, can we introduce the students efficiently to fundamental philosophical problems and discussions that are basic and important in western philosophical tradition? In the present paper I seek answers to the above questions and related ones to estimate the prospects of teaching the philosophy of mind as a general introduction to philosophy at a college or university. I also explain how I've been trying to deliver such lectures at a certain university for several years. Finally I present in the appendix an example of teaching materials that I prepared for my lecture course.

キーワード：哲学教育，心の哲学，哲学的自然主義，言語哲学，意味の心像説，認知言語学，プロトタイプ理論

philosophical education, philosophy of mind, philosophical naturalism, philosophy of language, imagery theory of meaning, cognitive linguistics, prototype theory

1 哲学の中心主題とは

こんにちわが国において大学の一般教育科目として哲学を講義する意義や困難については、いまさら多弁を弄するまでもなからう。かわりに本稿では、ほんらい哲学という学問領域を概観すべき「哲学概論」の授業について、筆者がどのような構想のもとに授業プランをたて、講義を実施しているかを報告し、読者の参考に供したいと思う。

哲学概論の講義を担当することになったときに、最初に考えたのは、かつて自分が学生のころに受講した哲学概論の講義は、はたしてどのような方針にもとづいて計画され、実施された

授業であつたらうか、という点についてである。現在、わが国の大学で哲学概論の講義をおこなっている学部や学科がどのくらいあるか、寡聞にして筆者は知らない。だが、「西洋哲学の全容を15講で概観せよ」との要求が無体であることに、昔も今も変わりはあるまい。じっさい筆者が受講した講義では、担当教員の専門分野における基本概念の解説と、若干の主要学説の紹介とに——たいへん興味ぶかくはあつたが——終始していた。15講の授業時間をつかっているのは、せいぜいその程度なのかもしれない。二千年をゆうにこえる学説史の通覧には、二カ年にまたがる「西洋哲学史」の講義が別途用意されていたが、それとて古代から近代にいたる思想史のながれを押さえるには「駆け足」もいゝところであつた。しかも哲学の場合、学界の合意事項として「定説」と呼ぶに価する標準見解が、およそどの時代にも——権威と権力によって「正統」と「異端」が峻別されている場合を除けば——ほぼ皆無である。こうした特殊事情にかんがみれば、「そもそも哲学の講義に概論がありうるのだろうか」という疑念が頭をもたげるのも無理からぬところではある。

ところで、前世紀の分析哲学を総括する標語のひとつに「言語への展開 (linguistic turn)」という言い回しがある。むろんのこと、分析哲学という潮流が、特定の標語のもとに推進された一枚岩の運動であるわけではない以上、こうした標語によって単純に性格づけられえないのは言を俟たない。しかし、この標語の言わんとすることにも一理はある。それは、伝統的に問われてきた哲学上の問題のおおくを、それらを定式化する言語表現に着目することによって、いっそう明瞭に分析したり解消したりできるとする点である。つまり、哲学上の諸問題というのは、それらを提起する言語活動への洞察を欠いたままでは、解決はおろか、明確な問題設定すらかなわないとの認定である。いささか挑発的なもの言いをすれば、いまどき言語哲学すら学ばずに、哲学上の問題について論じようという姿勢が、そもそも時代錯誤的なのだとの論難である。より穏当には、哲学という活動全般にたいする指導理念の一種といえる。

とはいえ、こうした総括のしかたに筆者は違和感をもつてゐる。言語への関心が、前世紀の哲学を駆動する推進剤として、さうとう広範囲で機能してきたのは、たしかに事実だろう。だとしても、問題の深化や解決への見通しが言語現象の分析を核として得られたと実感できる事例が、じっさいのところ、どの程度あろうか。西洋哲学の中心関心を概観しうる講義案をつくろうとすれば、言語の哲学を核にすえてプランを立てるべきだろうか。この方針をほんきで検討しようとするれば、つぎの点を問うてみるべきではないか。——言語現象じたいを主題としていないにもかかわらず、関連概念を表記する用語法の分析や、問いや主張を定式化する言語活動への洞察を機軸として、問題を検討しうるケースがどれくらいあるか。模範的なケースはおそらく知識論や行為論の一部、存在論や真理論の大半だろう。だが、道徳哲学や政治哲学、教育哲学、法哲学、医療哲学などのように、メタレベルの議論だけでなく、個別の実践的課題について実質のともなつた問題解決がもとめられる研究分野では、言語論だけで埒があかないのはいかにも明白である。だとすれば、いくら「言語への展開」を標榜してみたところでしょせんはただの掛け声にすぎないではないか。言語の問題を中心にすえることなく、解決にむけて前進のはかれそうな問題など、ざらにあるだろう。哲学の中心主題として言語現象をと

りあげたのは、勇み足だったとは言えないだろうか。

こうした疑念とは対照的に、究極において心の問題を経由せずに解決可能な問題がどれほどあるかとの疑問がある。認識や知識がひとに宿るといふとき、当の主体の心のありかたを詮索せずに探究を成功裏におえうる見込みがどれほどあろうか。認識の主体がどのような心的機構をそなえているかは、どの範囲で認識が可能かという、成立の実質にかかわるのではないか。価値や規範についても、事情は同じではないか。価値や規範の本性を解明しようにも、それらを意識する主体のありかたを考察することなく、どれほど消息を明らかにしえようか。心理現象と生理現象や物理現象との境界がほぼ連続的になりつつある現在、問題の根源をつきつめていくさいに“心”に逢着する機会は、今後ますます増えていくことだろう。哲学の伝統がこれまで問うてきたことがらのうちで、われわれの心的機構の解明をまたずに回答が期待できる問いなど、一部の形而上学を除けば、ほとんどないのではあるまいか。

哲学の探究において言語現象と心理現象のどちらがより根源的か。——問いをこのように立ててしまうと、問いかけ自体が、一種の擬似問題にみえてくる。言語使用は人間の活動領域の隅々にまで余すところなく根を下ろしているのだから、およそ人為を問題とする局面で、言語使用がまったく無関係となることはおそくない。視点をいっそう広げるなら、言語現象をめぐる問題は、記号現象一般を考察するなかで特殊事例としてあつかうべきものであり、記号現象は自然界における「情報のながれ」という、さらに広汎な現象のうちに適切な位置づけをもつ公算がある。また心理現象についても、生体内での記号処理過程として解明を期待しうらだろうし、さらには言語現象と同様、やはり自然界における「情報のながれ」の一部として適切な位置づけをもつ見込みがすくなくある。人為と自然とを説明において統合する——時代の要請ともいうべき——こうした可能性を真剣に考慮すれば、言語現象と心理現象のどちらか一方が、哲学上の問題解決の場面でいっそう基礎的な役割をはたすかどうかなど、たんに外的外れな問いとみなすべきかもしれない。ことによると、志向性と記号着地のように、心理現象と記号現象はがんらい表裏一体であって、自然化を拒むしかたにおいても類比的であると判明する可能性もないわけではない。

とはいえ、言語への洞察を中心にすえて哲学の主要課題を簡潔に紹介するという方針をかりに立てたところで、それにもとづいて講義プランを作成するのはいたって難しい。次節で述べるように、筆者の場合、いわゆる「心の哲学 (philosophy of mind)」を中心に哲学全般への入門にあたる講義をおこなっている。それが、哲学について予備知識をもたない受講者の関心を比較的スムーズに哲学上の問題へとみちびく効果的な手段だからである。それにたいし、個別言語のそれにとどまらない言語使用一般を講義主題としたのでは、受講者の関心を引きつけるのが、いささか難しくなる。もちろん、外国語大学や外国語学部や言語学科などのように、言語現象にたいして学生が高い関心を維持しうる一部の学校や学部や学科であれば、おそらく話はべつだろう。しかしながら、それら以外の大半の学校や学部や学科では、哲学全般への入門という同じ意図のもとで講義をおこなうにしても、言語よりは心——とりわけ人間のそれ——を主題とするほうが、戦略上いっそう有利な選択であろう。

2 担当科目について

以下では、筆者がじっさいに講義を担当した授業科目のひとつをとりあげて、授業運営上の課題や問題点を報告する。さらに補足資料として、講義で使用した教材の一部をかかげる。

本稿でとりあげるのは、北海道内の私立大学で選択科目として実施された「哲学概論」の講義である。一回90分進行の講義を合計15回おこなっている。2013年度には、下記の構成で講義を実施した。各回の講義内容については紹介はあぶくが、八回目の講義での配布資料を参考のため付論にかかげる。

1 心と物

- 1-1 心身の非対称性
- 1-2 生命原理としての心
- 1-3 心身二元論
- 1-4 唯心論と独我論
- 1-5 唯物論と還元主義

2 自己と他者

- 2-1 自他の非対称性
- 2-2 類推による理解
- 2-3 意味の心像説
- 2-4 私の根源性
- 2-5 規範意識と他者

3 心と環境

- 3-1 行動主義
- 3-2 フレーム問題
- 3-3 行為理解の合理性
- 3-4 心理過程と情報
- 3-5 環境というシステム

参考図書は講義中に適宜紹介しているが、学術論文に見られるような文献参照は、配布資料ではすべて省いている。一般教育科目である以上、講義の目的を、文献研究の専門家を養成することにおいてはなない。また、受講者の学習意欲も概して高くはない。ありていに言えば、学業よりは、授業以外の課外活動のほうに熱心である。したがって、学生スポーツの競技会などを除けば、学校名を目や耳にするのは不祥事が発覚したときくらいという、わが国によくある平均的な私立大学のひとつである。もちろん、受講者のおおくは哲学上の学説についてなん

の予備知識ももっていないし、読書習慣もいたってとぼしい。そういう、思想的にあまり手垢の付いていない学生をあいてに一から授業をするのだが、講義内容への学生の関心は、かならずしも低くはない。なかには、熱心に聴講したうえで、授業評価アンケートにいそいそとコメントを書き込んでくれる学生も、さいわいなことに例年あらわれる。受講者の関心は、書物ではなく、提起された問題へとむかっており、これはたいへん健全な傾向だと担当教員は考えている。むしろ、高度な専門教育をうけた研究者のおおくが、研究能力の大半を費やしてひたすら文献読解にいそしんでいる、わが国の哲学研究の現状のほうが、よほど不健全ではあるまいかとの懸念すらいっている。哲学者であれば、たがいの論文を批判しあいながら文献解釈の正当性をあらそうよりも、まっすぐ問題じたいに取り組むべきではあるまいか。学問を志すものは、古来より「少年老い易く学成り難し」と戒められてきた。ひとが研究の前線にいられる時間など、そう長くはなからうからである。

講義計画を立てるにあたっては、前年度の講義への反省をふまえ、内容の大幅な入れ替えをおこなう傾向にある。とうぜん教科書は指定していない。ひとつには受講者の反応を講義内容に反映させるためである。ようは「受けの悪かった」話を、もっとまじな反応の期待できそうな話題でおきかえようと意図している。いわば「人気ランキング」による話題の入れ替えとも言うべきものだが、注意すべき点がひとつある。学生の受けがよかった話をなにも考えずに優先していたのでは、たしかに授業は盛りあがるだろうが、講義計画の一貫性がそこなわれてしまう。昨今の大学の一般教育では、教授する側に「講座を高座にするぐらいの覚悟」¹⁾が要るといっても、テレビのパラエティ番組のように、ただ「娯楽」として消費されておしまいになるようでは、講義をおこなう意義すら疑われる。公教育活動の一環として授業運営にたずさわる者には、講義でとりあげた個々の主題について、それらを受講者が学んだり考えたりすることが、どんな関心のもとでどの程度の重要性をもつかを、求めにおうじて説明する用意があってもよろしかろう。ようは、研究や教育の内容について公的な価値をあらためて問う局面があつてしかるべきだ、ということである。

教科書を指定せずに一年ごとに内容を編成しなおすという、なにやら手間のかかる方針をあえて選んだもうひとつの理由は、いわゆる「心の哲学」に焦点をしばりきることへの躊躇である。この躊躇はつぎのような不満に根ざしている。心の哲学というジャンルについて、かつて菅野盾樹氏が「確かに研究は沸騰状態にあるが、十指に満たない学説に多少のヴァリエーションと多少の新知見とをブレンドして、それらを再生産し続けているのが現在の研究状況だ」²⁾と喝破したことがある。この指摘からすでに15年ほどが経過したが、筆者のみるところ、状況がおおきく改善されたようすはない。哲学上の議論や問題設定にもやはり「はやりすたり」があつて、十年から二十年くらいの長さで研究史をてきとうに区切ってながめていけば、それぞれの時期の研究動向がもつ特徴がおおよそはつかめる。現場の研究者たちは「パリの最新モード」に飛びついたり、勝ち馬に乗ろうとしたりする傾向をもつ。ジャンルが活況を呈している時期に研究者らが流行の影響をうけやすくなるのは、やむをえない。自分がいま身をおいている当の状況を、未来の歴史家の視点から眺めることはできないからである。だが、その結果、

主題やアプローチの重要度にたいする評価が「今、ここ」を起点としたパースペクティブによって、おのずと歪められてしまう。こうした歪みは、それぞれの時期に書かれた教科書や論文集の目次に反映されることになる。もともと、哲学上のあるジャンルを概観する講義の担当者が、既成のテキストの章立てに満足することは、あまりないだろう。学生にとって手ごろなボリュームをもつ一冊の教科書が、当該ジャンルにたいする担当教員の関心の大半をカバーしているとすれば、よほど目配りのきいた著者の手になるものにちがいない。したがって、どんな視点から眺めわたせば、すでに広大なひろがりをもつにいたった一つのジャンルを概観できるかに、担当教員は頭を悩ませがちである。

前述のとおり、講義計画は、個々の主題にたいする担当教員の関心の強弱に単純にしたがって作成しているわけではなく、前年度までの受講生らの反応をフィードバックしたうえで決定している。とはいえ、教授する側と聴講する側の双方でたんに関心のおりあいがつきさえすれば、それでよいかというと、そうではなかろうと考えている。哲学の手法を駆使して、こんにち、われわれがどのような課題にとりくむべきかについても筆者なりの判断があって、それを講義計画に反映させたいとの考えからである。まわりくどい言い方はせず、その考えをできるだけ直截かつ簡明に記しておく。

自然環境と人間とのかかわりを——活動主体相互のあるべき姿をふくめ——現在の知識状況にてらして統一的に描き出すこと。そのための「見取り図」にあたるトータルな自然観や人間観を、仮説的、投機的にであれ提示すること。それが、この時代に哲学にとりくむ者にとってもっとも重要な課題のひとつであるとの私見を、筆者はもっている。また、この課題にこたえようとする試みの一端に、できることなら受講者を触れさせてやりたいとも考えている。そのために、講義全体をつうじて、自然現象と人為現象を統一的に理解する枠組みをなんとか提示できないものだろうか、試行錯誤をつづけている。生命や自然への関心にもとづいて心的現象を総体として理解しようとするとき、説明の見取り図をどう描くべきかということである。見通しのよい描像をえるために、学術研究上の縄張り意識にとらわれることなく、問いと答えのおりなす体系をどう構築すべきか、そこから講義内容をどう切り出すべきか。これらの点に腐心しながら講義計画を練っている。作成された計画はそうした試行錯誤の結果であり、また心的現象のトータルな理解をめざした試験的、暫定的な投機の試みの一端でもある。——「大言壮語がすぎる」とのそしりは甘んじて受けざるをえないが、教授する側の思わくは上記のごとくである。

付論

2-3 意味の心像説

説明を聞いてもピンとこないとき「イメージがわからない」などという。イメージをくっきりと脳裏に描けることが、物事を理解した印なのだと、つい考えたくなる。言語理解についていえば、こうした見方はたんに誤りである。この章の目的はそれを示すことにある³⁾。

2-3-1 ことばの意味を求めて

ことばの意味を理解するとは、当のことばを言語外の“もの”と結びつけることではない。そう考えてなぜいけないのか、いけないにもかかわらず、なぜそう考えてしまうのか。そこには言語理解についての誤った描像がある。

そもそも、音声や文字というものは、物理現象としてそれだけを取りあげるなら、たんなる音響やインクのシミなどにすぎない。それらが“ことば”として意味をもち、さまざまな事項を指し示すようになるのはどうしてなのか。——問いをこのように立ててしまうと「意味の成立とは、ことばとそれが指し示す対象との“結びつき”を確立することにほかならない」という考えが、いかにも自然に思えてくる。そこで、こうした結びつきがどうやって伝達されるかを考えよう。ことばの教えかたには二種類ある。

(A) 理解すべきことばの意味を別のことばを使って説明する。

(B) 実物を示して——たとえば犬を指しながら——「これが犬だよ」と説明する。

(A) のような“ことばによる説明”では、説明にもちいられた表現——説明項——についてふたたび意味を問題にできる。説明項の意味がわからないかぎり、こうした説明を理解することはできない。たとえば、辞典の説明をよんで理解できるのは、すでにかんりの語彙を習得できている場合にかぎられる。しかも、説明項の意味をさらに別のことばを使って説明しているかぎり、聞き手はいつまでたっても“ことばの世界”から抜け出せない。そこで(B) のような説明のしかたをかわりに考える。とくに基本的な語彙について“ことば”を“もの”とじかに結びつけられれば、それによって聞き手を“ことばの世界”の外に連れ出せるはずである。こうした(B) のような説明方式をさして「直示 (ostension) による説明」とか「直示的な定義 (ostensive definition)」などと呼ぶことがある⁴⁾。

なるほど、上のような発想はいかにも自然である。しかしそれは、われわれを出口のない袋小路へと誘いこむ。こうした説が中心において考えている“ことば”は、事物のありふれた名称 (人名や地名) とか、性質 (「赤い」)、状態 (「立っている」)、動作 (「走っている」) などをしめす語彙である。だが、ほかの種類 of 基礎的なことば——「または」、「ない」、「これ」、「どこ」、「上」、「明日」、「一つ」、「形」、「幸せ」のあらわす事項を直示によって理解させるには、どうすればよいのか。たとえば勇気があるとはどういうことかを子供に理解させたいとする。そのため災害救助の現場まで出かけていき「ごらん、あれが勇気というものだよ」と指さす。だが、子供から「あれって何のこと？」という質問が返ってくる。そこで「あれというのは、救助活動のことだよ」と説明を補足する。ところが、返ってきたのは「それのなにが勇気に当たるの？」という、あらたな質問だった……。この例が暗に示しているように、あるていどの語彙をすでに習得している相手にたいしてですら、直示による説明には限界がうかがえる。

仏教の經典に「月を指せば指を認む」という言いかたがある。文字どおりには「話し手が月

を指さしても、聞き手は指先を見つめて月に視線をむけようとしなさい」という意味だ。一種の“たとえ話”になっていて「教理をことばでいくら説明しても、聞き手や読み手を奥義の理解にいたらせるのは難しい」という事情をあらわしている。一般に、説明の手段にばかり気をとられて、理解すべき対象に関心をむけようとしなさいことが、説明の場面ではおこりがちだ。だから、直示的な定義が説明としてうまく機能するためには、それによって聞き手の理解を適切な方向に誘導する必要がある。その誘導がうまくいくという保証は、どこにあるのだろうか。

そもそも“ことば”と結びつけられるべき“もの”が存在しない場面で、ことばの意味への理解はどうやって達成されるのか。たとえば「太陽系の九番目の惑星は存在しない」と言いたいときには、「太陽系の九番目の惑星」という句を理解するため、存在しないはずのその惑星を探し出して、ことばと結びつけておけというのか。架空のキャラクターをあらわす名前についてはどうだろう。直示による説明の限界は明らかではないか。

こうした困難を避けようとする、次のように考えたい。——意味の説明においてことばと結びつけるべきなのは、たんなる“もの”ではなく“観念”である。たとえ存在しないもの——ユニコーンや孫悟空——であっても、想像はできる。そのとき想像によって把握された観念こそが、ことばが指ししめす当の対象である。ことばを言語外の“なにか”と結びつけるのは、ほんらい心のはたらきであって、心によるこの結びつけが生じたそのとき、ことばの意味をはじめて理解したことになる。——このように、ことばの意味を、ことばを見たり聞いたりしたときに「心にうかぶイメージ (mental imagery)」と重ね合わせようとする説明方式を「意味の心像説 (imagery theory of meaning)」と呼ぶ。この説は、克服しがたい難点をもつことが、すでに知られている。

2-3-2 意味としての心像

意味の心像説によれば、たとえば「犬」という単語には、犬の“観念”が結びついており、この結びつきが「犬」という語の理解を成立させる。そこで、つぎのように問ってみよう。

その“観念”というものが——正体が何であれ——「犬」という単語と結びついているから、われわれはこの語を正しく使えるようになるというのだな。では尋ねるが、それがあれば、どうして「犬」という語をただしく使えるようになるのか。

「犬」という語は、犬であるものに対し——それらのみを指すのに——使われるべきだろう。そうした弁別に必要な知識が、犬の観念をもつことでほんとうに得られるのだろうか。

一言で「観念」とか「心像」とかと呼んでも、五感から得られる情報をもとに形づくられるイメージには、種類がいろいろある。犬の観念も、視覚的なイメージばかりとはかぎらない。人間の認識にとって視覚情報はたしかに重要だけれども、それ以外に、聴覚的なイメージ (犬の鳴き声)、嗅覚的なイメージ (犬のにおい)、触覚的なイメージ (犬をなげたときの手触りや温もり) なども、犬のイメージにふくまれよう。ただしここでは、話をできるだけ簡単にする

ため、視覚的なイメージに的をしばって考える。そのうえで、視覚的なイメージを画像——静止画や動画、3D画像など——と類比してみよう。

さて、犬の視覚像とはどのようなものだろうか。一頭の犬——ないし犬の群れ——のイメージだろうか。それを心のなかで形成しさえすれば、ほんとうに「犬」という語をただしく使えるようになるのか。たとえば愛犬の姿を生き生きと鮮明にイメージできたとする。思い描かれたイメージは、愛犬をほかの犬から識別するうえで有効かもしれない。だが、いま問うているのは「一頭の犬をどう見わけられるか」ではない。そうではなく「一般に、犬であるものをそれ以外のものから、イメージを活用してどう識別できるか」である。

具体的な犬のイメージは——首輪の有無、雌雄の別、年齢や性格のちがいなど——犬であるかどうかにとって、さしあたりどうでもよい特徴をいろいろとふくむ。だから、犬のイメージを活用する側が、それらのどうでもよい特徴に着目して、何か犬かどうかを判別しようとしたら誤った判定をくだしかねない。イメージの元になった個体がたまたま具えてただけで、犬一般が共有していない特徴を、犬であるための条件と誤解しているからだ。おなじ問題を、犬を撮った写真についても指摘できる。一枚の写真に照らして、目の前にいる何か犬かどうかを判定する場面を考えてほしい。被写体のもつどの特徴がそれを犬たらしめているか、どうすれば判定者にわかるのだろうか。

犬の種類は、驚くほど多様だ。狩猟犬と、牧羊犬と、闘犬と、愛玩用の座敷犬では、大きさも、見た目も、習性も、用途も、かなりまちまちだ。それらのちがいは、偶然の産物というよりも、人間のつごうで意図的につくりだされたものだ。つまり品種の多様性は、人為的な交配による改良の産物である。そうした種類のちがいにもかかわらず、犬が犬であるかぎりでは欠かすことのできない特徴はなんだろうか。言いかえると、犬をほかから区別するうえで注目すべき“本質的な”特徴はなにか。——それさえわかれば「犬」という語の適用範囲がきちんと定まるではないか。

話を視覚像にもどそう。たしかに一頭の犬の写真は、その犬のもつ視覚上の特徴をとらえているだろう。だが、そこでとらえられたさまざまな特徴のうち、どれが、犬であることにかんして本質的に重要なのか。それが何かをイメージは描写しない。たとえば被写体の背景に写りこんでいる風景は、被写体が犬であるかどうかにとってはどうでもよかろう。だが、それがどうでもよいことを写真じたいは教えてくれない。犬が首輪をつけていることも同様だ。体格が中型であることや、しっぽを振っていることだって、犬であることにとって必要でも十分でもないが、そのことは、たんに写真どおりのイメージを心に思いうかべるだけで、ただちにわかることではない。——イメージというものは、それをどう活用すべきかについて、なにも語らないものなのだ。

2-3-3 一般観念の無力さ

犬をそれ以外の対象から区別する分類の観点——それが「犬」という分類名称を適切に使用する鍵だ。この用法の理解にとって、犬の具体的なイメージは、期待されていたほどには役だ

たないことがわかった。犬と猫を区別する観点は、一頭の犬のイメージと一匹の猫のイメージを単純に並置するだけでは手に入らない。では、個々の犬ではなく“犬一般”のイメージならどうだろう。犬一般をくっきりととらえる抽象的なイメージを、犬の「一般観念」と呼ぶことにする。一般観念なら、犬の具体的な描写がもつ“過剰な特徴”を一切ふくまないはずだ。とすれば、具体的なイメージの場合とはちがって、犬であることに無関係な特徴が「犬」という語の理解をさまたげることもなかろう。——そういう期待をもちたくなる。その期待はおそらく満たされないだろう。「犬」という語の意味を一般観念をもちだして説明しようとする、次のようになる。まず「犬であるとはどのようなことか」——犬であるための必要十分条件を、犬の一般観念と重ねあわせる。つぎに、この観念を形成しているがゆえに「犬」という語の意味を理解できるのだとする。さらに、この理解によって「犬」という語をただしく適用できるようになると結論する。この説明は“意味の理解”にあたる何かを「一般観念」と呼びかえることで問題解決のよそおいを与えているにすぎない。その証拠に「犬の一般観念はどうやって形成できるのか」と問いかけると、とたんに問題がふりだしに戻ってしまう。

何かが“犬”であるかどうかを、ひとはどうやって判定するのか。そうした判別能力の獲得経緯こそが、ここでの説明課題である。この課題に「犬の一般観念をもつことによって」と答えてすましていたのでは、果たすべき課題にべつのレッテルをはりつけて、問題を“棚上げ”していることになる。つまり「犬」という語の“意味”を理解するという事態を「犬の一般観念をもつこと」と呼びかえているにすぎない。そもそも「犬」という分類名称をただしく理解するとは、犬と犬でないものを正しく分類できるということだ。だから、われわれはここで、犬をたとえば猫から区別する分類能力の説明を必要としていることになる。こうした能力は、たんに心的なイメージをもつだけでは、おそらく獲得できない。

そもそも“犬一般”の観念とは何だろう。それが犬の共通特徴を申し分なく描き出しているなら、犬の一般観念とは、犬概念の厳密な規定——つまり“定義”にほかならない。問われているのは、“犬”の定義の理解へとどのようにして到達できるかである。犬一般の特徴を過不足なくとらえたイメージなど、かりに存在するとしても、犬概念の厳密な規定を経ることなしにたどりつけるものではなかろう。そうした犬の定義をおさえることにいったん成功したなら、そこから、犬を分類する行為へと進めるだろう。そのさいに犬の一般観念を経由する必要がそもそもどこにあるのか。——犬の一般観念など、ここでは使い道のない“遊び駒”にすぎない疑いが濃厚である。

心的であろうとなかろうと、観念、画像、イメージなどへの言及は、言語表現の理解を説明する場面では、概して必要がない。次のような状況を考えてみよう。ある人が「犬を1頭連れて来なさい」と命じられた。彼女は、まわりにいる動物のうちから、自分のもっている犬の観念と、なんらかの適切なしかたで特徴の一致する動物を連れてくる。この場面で観念を役だてようとするれば、こうした“見本”としての用途しか使い道がなかろう。だが、犬のイメージをただしく適用して犬個体をえりわけるために、彼女は何をすればよいだろう。具体的なイメージが無力であるのは、すでに指摘したとおりだ。犬であるために、現物とのあいだでどの特徴

が一致すべきかを、イメージは教えないからである。そこからさらに進んで、こう問うてみよう。——「必要におうじて犬のイメージを思い浮かべるにはどうすればよいのか」さまざまなイメージをでたらめに思い浮かべたとき、そのなかに犬のイメージがたまたま含まれていることは、もちろんありうる。しかしながら、それが“犬の”イメージであることは、どうすればわかるのか。心に描きうる雑多なイメージのうちで、どれが“犬の”イメージかを決定するために、イメージの見本を参照することが必要なら、一步も先に進めなくなる。

つまりこういうことだ。犬のイメージを猫のイメージから区別し、前者を、犬であるものの候補と照合したいとする。その場合、まず、数あるイメージのうちから、犬のイメージを選びださねばならない。そのため、犬のイメージの候補と犬のイメージのイメージを照合したい。ところが、犬のイメージと犬以外のもののイメージを見わけると、犬のイメージのイメージが見本として必要になるなら、無限背進がはじまる。というのも、犬のイメージのイメージにだって、候補はいくつもあるからだ。とすれば、何かが犬のイメージのイメージかどうかを見わけねばならなくなる。そのため見本として、犬のイメージのイメージのイメージを心に思い描いて……。これでは、いつまでたっても、めざすイメージへとたどりつけなくなる。

むしろこう考えるべきではないか。犬を識別するのに必要なことは、犬の特徴を押さえることである。犬の特徴の把握は、「犬」という語にどんなイメージを結びつけるかとは、おそらく独立である。たとえ「犬」という語を耳にするたび、“犬”のイメージではなく、犬好きだった“郷里のおばあちゃん”の面影が脳裏をよぎるとしても、イメージ形成のこうした傾向性は言語習得をさまたげないのではあるまいか。心に何をイメージするにせよ、犬のもつ一般的な特徴を押さえることができさえすれば、だれでも犬と猫の見わけがつくだろう。だとすれば、犬を猫から識別する場面で犬のイメージを思い浮かべようとするのは、よけいな“回り道”というものである⁵⁾。

2-3-4 カテゴリーの形成

過剰な描写を一切ふくまぬ犬の一般観念というのは、犬の厳密な定義にほかならない。しかも、そうした定義はそもそも存在しないだろう。犬についての通常理解は、厳密な特徴づけを許すようなものではないからだ。犬とは何かを学習する過程で、犬の定義など参照されていない。参照したというなら、その定義を思い出してみたい。数学や物理学などの理論性のたかい学問領域とはちがって、日常の概念のおおくは、定義をつうじて習得されるものではない。

百歩ゆずって、犬の学術的な定義があるとしよう。だが、犬であるものとなないものを選びわけると厳格な基準が存在するとしても、そうした特徴づけは、「犬」という語の日常の使用とは区別して考える必要がある。というのも、日常語としての「犬」は、定義によらずさまざまな実例をつうじて学習されるからである。学習に使われるサンプルは、まずもって身近にいる犬たちだ。こうした典型例——犬の“プロトタイプ”——のほかに、実物が身近にいない種類の犬たちについても、図鑑などの記述や画像などをつうじて情報があたえられる。学習につかう

こうしたサンプルから特徴がかけはなれたケースだと、はたして犬に当たるのかどうか判断にまようこともありうる。それゆえ、犬であるものすべてが、かつ、それらのみがもつ共通特徴による学習とは異なり、境界付近にある変則事例をうまく処理することが必ずしもできない。けれども、犬であるものとならないものの境界線がおおよそどのあたりに引かれるべきなのかは、犬の種類ごとにサンプルを学ぶことで理解できるようになる。その学習のために、狼やコヨーテやジャッカルや狸などのように、犬の仲間に見えるかもしれないが実は犬でない動物のサンプルも学習段階で参照される。こうした反例は、犬であるものの特質をきわだたせるための、いわば“引き立て役”にあたる⁶⁾。

日常語の「犬」を分類名称として活用するため、分類の観点について、さらに学習をすすめねばならない。つまり“犬”とは何かをおおまかに押さえるために、この項目の上位に位置する分類項——肉食動物、哺乳動物、脊椎動物など——や、下位に位置する分類項——ブルドッグ、チワワ、ドーベルマンなど——との関連を頭にいれる必要がある。自然物を分類するこうした系統のなかでどんな位置を占めるかという理解が、犬概念の習得の中核となる。すでに述べたように「犬」という語は、定義をもちいて学習されるものではない。かわりにわれわれは実例によって自然物をおおまかに分類する“網の目”を、幾重にも張りめぐらせている。犬について言えば、おもに生物学的な関心にもとづく分類以外に、飼い主の有無や利用目的のちがいなど、人間社会とのかかわりにもとづく区分がある。犬の品種にしたところで、大部分は人為的な交配によって生みだされたものだ。

事物の分類法は、おおくのばあい、分類する側の関心の所産——もしくは投影である。この点を理解するには、われわれ人類を分類する雑多な観点を考えてみるとよい。おなじく生物種としての「ヒト」を分類するにしても、たとえば、人種ごとに分類する人類学的な観点や、文化のちがいで分類する民族学的な観点や、所得や消費行動に着目する経済学的な観点、うけた教育に目をむける教育学的な観点、疾患の種類や健康状態による医学的な観点等がある。そのほかにも、国籍や居住地などによる行政上の分類、性別や年齢や体型のちがいを重視する服飾業界の分類、運勢のちがいを判定する占星術の分類など——多種多様な観点から人間の鑑定と分類が日々おこなわれている。こうした観点の差異は、分類をおこなう側が分類対象によせる関心のちがいを反映している。それらは、関心を満たすための手段の一部である。われわれは自然現象や社会現象を、関心や認識のおよぶ範囲で理解し分類につとめているが、言語習得はそうした分類手段の社会的な共有をふくんでいる。そこに心的イメージの共有がみつねにとまとうと考えるべき理由はない。

註

- 1) ジェームズ・レイチェルズ『現実をみつめる道徳哲学』（古牧徳生・次田憲和訳、晃洋書房、2003年）、「訳者によるあとがき」、209頁
- 2) 菅野盾樹『人間学とは何か』（産業図書、1999年）、100頁
- 3) 意味の心像説への本稿の批判は、『哲学探究』（1953）でのウィトゲンシュタインによる批判に

おおむね由来する。議論の骨子について下記文献の最初の二章（とくに第一章）を参照した。
丹治信治『言語と認識のダイナミズム』（勁草書房、1996年）

- 4) こうした命名をウィトゲンシュタインは歓迎しないが（『哲学探究』第一部第六節）、直示のおこなわれる状況の設定が本稿のそれとは異なるので、この点はとくに問題としない。
- 5) 意味の心像説が正しければ「犬のイメージをいま思いうかべてはならない」という命令にしたがうのは不可能となる。この文に含まれる「犬」という語の意味を理解するのに犬のイメージを参照せねばならなくなるからだ。だが、この文の意味をただしく理解しつつ命令にしたがうことは可能であろう。——あるいは、それは誤解なのだろうか。当人にその気がなくとも、命令内容を理解する過程で犬のイメージを自動的に参照してしまうのだろうか。だとすれば、イメージへのこうしたアクセスは無意識になされることになる。そのために情報処理のプロセスをだれも自覚できないのだ、と。——こうした可能性もたしかに皆無ではないが、人間の認知機構にかんするそうとう実証的な議論を背景としないかぎり、そこまでの申し立てはたんなる強弁というべきである。
- 6) カテゴリー化のプロトタイプ理論による説明については、下記文献の第3章以降を参照。
ジョン・R・テイラー『認知言語学のための14章（第3版）』（紀伊國屋書店、2008年）

（はせがわよしまさ 現代哲学）